



日本文学全集 30

昭和名作集  
Ⅳ

河出書房版

日本国民文学全集 第三〇卷 昭和名作集(四)

昭和三十一年一月十日初版発行

昭和三十一年五月三十日三版発行

定価三四〇円

著者代表

山本有三

発行者

河出孝雄

印刷者

東京都千代田区神田小川町三ノ八  
川口芳太郎

発行所

株式会社

河出書房

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話(二九)三七二番

振替東京一〇八〇二番



# 目次

## 自序

### 雲片片(小曲五十六章)

|        |    |
|--------|----|
| 草と人    | 七  |
| 鼠      | 七  |
| 賀川豊彦さん | 九  |
| 人に答へて  | 一〇 |
| 晩秋の草   | 一一 |
| 書齋     | 一一 |
| 我友     | 一二 |
| 戀      | 一三 |
| 己が路    | 一五 |
| また人に   | 一六 |

|          |    |
|----------|----|
| 車の跡      | 六  |
| 繫縛       | 六  |
| 歸途       | 六  |
| 拍子木      | 二〇 |
| 或夜       | 二二 |
| 堀口大學さんの詩 | 三三 |
| 岬        | 三三 |
| 靜浦       | 三三 |
| 牡丹       | 三四 |
| 弓        | 三五 |
| 秋思       | 三六 |
| 園中       | 三七 |
| 人知らず     | 三六 |
| 飛行船      | 三六 |
| 柳        | 三九 |
| 易者に      | 四〇 |

|             |    |
|-------------|----|
| 甥……………      | 三  |
| 花を見上げて…………… | 三  |
| 我家の四男……………  | 三  |
| 正月……………     | 三  |
| 唯一の間……………   | 四  |
| 秋の朝……………    | 五  |
| 秋の心……………    | 五  |
| 今宵の心……………   | 七  |
| 我歌……………     | 七  |
| 憎む……………     | 六  |
| 悲しければ……………  | 六  |
| 緋目高……………    | 四〇 |
| 涼夜……………     | 四一 |
| 卑怯……………     | 四二 |
| 水樓にて……………   | 四二 |
| 批評……………     | 四三 |

晶子詩篇全集  
上

## 妻

### 一ノ一

行介(ゴースク)はいつもの停留所でありた。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならぬほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行った。とき／＼、紙くすや、こつばなぞが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それでも、カラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、お／＼粒の砂がパラパラと、彼のえり首に落ちてきた。彼は、横丁にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思った。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、しばらくしてから、きょうは寒いから、帰りに肉でも買ってこよう。けさ、出がけに、妻にそう言ったことを思い出した。

そうだ。肉を買って行ってやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえば肉を切っているあいだ、行介は厚

いマナイタの前に突っ立って、ホーチョーの動きさをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打って、彼の胃ぶくろを波立たせた。

マナイタの上に斜に落ちているゆう日が、

鋭い刃ものにあたって反射すると、ちょうど油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげてある大きなガラス戸ダナに、きら／＼、きら／＼、ちいさい光をはねかせた。

突然、ふわとしたものが、ひざのあたりにからみついた。彼はびく／＼して下を見た。

ふる新聞が風に吹きまわられて、飛んできたのだった。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もととは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや。」

心の中でつぶやきながら、彼はいま／＼しように新聞を往来にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになって、ふる新聞はなか／＼足から離れなかった。彼はしかたがなしに、ほ／＼だらけの紙を指でつまんで、かざしに放してやった。ぼろ／＼に破れた、大きな紙きれは、また往来をころがって行った。

肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだぐらい、まの悪いものはなかった。

板まえば切った肉を竹の皮の上に薄くのば

して、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に載せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくった犬のように、黙ってそれをながめていた。

「見並(ミナミ)君。」

肩のところで声がした。ふり向くと、丸い顔が笑っていた。園田ジノ吉だった。

行介はちよつとしよげたが、向こうが笑っているの、彼もてれ隠しに、ほ／＼えんで見るよりほかはなかった。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかったな。」

### 一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせるように言った。「あい変わらずのろいね。」

「あい変わらず女房孝行だね。」

「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからないと、思った。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだ。」

「ふん。」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなぞは、感心だよ。」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。お

## 自序

美濃部民子様

わたくしは今年の秋の初に、少しの暇を得ましたので、明治卅三年から最近までに作りました自分の詩の草稿を整理し、其中から四百廿壹篇を撰んで此の一冊にまとめました。かうしてまとめて置けば、他日わたくしの子どもたちが何かの底から見附け出し、母の生活の記録の斷片として讀んでくれるかも知れないくらゐに考へてゐましたのですが、幸なことに、實業之日本社の御厚意に由り、このやうに印刷して下さることになりました。

ついては、奥様、この一冊を奥様に捧げさせて頂くことを、何とぞお許し下さいまし。

奥様は久しい以前から御自身の園にお手づからお作りになつてゐる薔薇の花を、毎年春から冬へかけて、お手づからお採りになつては屢々わたくしに贈つて下さいます。お女中に持たせて來て頂くばかりで無く、郊外からのお歸りに、その花のみづみづしい間にと思召して、御自身でわざわざお立寄り下さることさへ度度であるのに、わたくしは何時も何時も感激して居ます。わたくしは奥様のお優しいお心の花であり匂ひであるその薔薇の花に、この十年の間、どれだけ勵まされ、どれだけ和らげられてゐるか知れません。何時も何時もかたじけないことだと喜んで居ます。

この一冊は、決して奥様のお優しいお心に酬い得るもので無く、奥様から頂くいろいろの秀れた美しくい薔薇の花に比べ得るものでも無いのですが、唯だわたくしの一生に、折にふれて心から歌ひたくて、眞面目にわたくしの感動を打出したものであること、全く純個人的な、普遍性の乏しい、勝手氣儘な詩ですけれども、わたくしと云ふ素人の手作りである點だけが奥様の薔薇と似てゐることに由つて、この光も香もない一冊をお受け下さいまし。

永い年月に草稿が失はれたので是れに收め得なかつたもの、また意識して省いたものが併せて二百篇もあらうと思ひます。今日までの作を總べて整理して一冊にしたと云ふ意味で「全集」の名を附けました。制作の年代が既にも自分にも分らなくなつてゐるものが多いので、ほぼ似寄つた心情のものを類聚して篇を分ちました。統一の無いのはわたくしの心の姿として御覽を願ひます。

山下新太郎先生が装幀のお筆を執つて下さいましたことは、奥様も、他の友人達も、一般の讀者達も、共に喜んで下さいますことと思ひます。

與謝野 晶子

雲  
片  
片  
(小曲五十六章)

「もう少ししろよ。」

「う、うん。——しかし、遅いな。」

「まだ、そんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買い物にしちゃ、

少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行ったか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちょっと

お尋ねいたしますが、手まえどもの家内はど

こにまいりましたらうって。」

「なんだ。本気にしていると、すぐちゃかし

やがる。」

「しかし、ほんとだよ。何かことづけがある

かもしれないぜ。」

「いいよ。女房なんか、いたって、いなくた

って。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取っちがえちゃ困るよ。

ぼくは奥がたが帰ってくりや、立ちどころに

引き取らうって人間なんだからね。」

「そう帰る／＼っておどかさなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なに

しろ、うちのほうがなんだからね……。」

「あ、そうか。はムム。——そんなに子ど

もってかわいもんかね。」

# 一ノ六

「しかしね、君……」

「驚いたな。これが当年の園田だと思うと。」

「まあ、なんとでも言うがいいさ。人間、子

どもを持たないうちは、まだ人生の半分しか

わからないんだよ。その意味で、君なんかは

半人まえぐらいの値うちつきりないんだぜ。

結婚して、まだやっと一年だろう。」

「おい、はじめておやじになったって、そう

威ばるなよ。」

「いや、べつに威ばりゃしないが、なんだよ、

君、子どもってものは……」

「子ども、子どもって、そんなに珍しがるこ

とはないじゃないか。ぼくなんか、子どもな

ら、なんにんでも持っているよ。」

「なんにんでも？」

「うム。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとさき。学校へ行けば、子どもなんか

うよ／＼している。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪

いよ。すぐ人をかつぐから。」

「いや、かついだんじゃない。まじめな話だ。」

「バカ／＼しい。学校の子どもなんか、なん

にんあつたって、しかたがないじゃないか。」

「そんなことないさ。」

「いや、君がなんと言ったって、他人の子じゃ

だめだよ。自分の子でなくっちゃ。どうも、

小学校の先生なんて、しょうがないね。こん

なことが、わからないんだから。」

「何がしょうがないことがあるものか。自分

の子だの、他人の子だのと、区別をつけるよ

うじや、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりや教壇に立った時の話だ。まあ、自分

の子どもを持ってしろよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「はムムム。実際、女房さえ食わせられな

いんだからね。——おや、もう九時になる。

こりや驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬

するよ。なにしろ、赤んぼうと産婦とおきつ

ばなしなんだからね。」

「そうか。そりや悪いことをしたな。あんま

り引きとめちゃって。」

「なあに／＼。じゃ、奥さんが帰ったら、ど

うかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行

くよ。」

「うん、是非やってきてくれたまえ。」

園田が帰ったら、家のなかは急にひっそり

としてしまった。行介はつまらなそうに、食

器の取り散らされているなかに、ごろりと横

になった。そして、今まで園田がすわってい

た座ぶとんを、寝たまゝ腕をのばして引っぱ

り寄せ、二つに折って、あたまの下にあてが

った。

牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼

火バチの上でうなっていた。焦げつくような

異臭が鼻を笑いたけれども、彼は起きあがろ

うとしなかった。

草と人

如何なれば草よ、

風吹けば一方に寄る。  
ひとかた

人の身は然らず、

己が心の向き向きに寄る。

何か善き、何か悪しき、

知らず、唯だ人は向き向き。

鼠

わが家の天井に鼠栖めり、

きしきしと音するは

〔初出〕詩十章―明星 昭2・1

〔初出〕詩十章―明星 昭2・1

鑿とりて像を彫む人

夜も寝ぬが如し。

またその妻と踊りては

廻るひびき

競馬の勢あり。

わが物書く上に

屋根裏の砂ぼこり

はらはらと散るも

彼等いかで知らん。

されど我は思ふ、

我は鼠と共に栖めるなり、

彼等に食ひ物あれ、

よき温かき巢あれ、

天井に孔をも開けて

折折に我を覗けよ。

賀川豊彦さん

わが心、程を踰えて

高ぶり、他を凌ぐ時、

何時も何時も君を憶ふ。

わが心、消えなんばかり

はかなげに滅入れば、また

何時も何時も君を憶ふ。

つつましく、謙り、

しかも命と身を投げ出だして

215  
・  
110  
・  
31  
〔初出〕詩六章―廣瀨實易新報  
◎詩十章―明星  
昭大

人と眞理の愛に強き君、  
ああ我が賀川豊彦の君。

## 人に答へて

時として獨<sup>ひとり</sup>を守る。

時として皆と親む。

おほかたは險しき方<sup>かた</sup>に

先づ行きて命傷つく。

こしかたも是れ、

行く末も是れ。

許せ、我が斯かる氣儘を。

215〔初出〕詩六章―横濱貿易新報  
110 ⑤ 詩十章―明星  
昭大

## 晩秋の草

野の秋更けて、露霜に

打たるものの哀れさよ。

いよいよ赤む蓼の莖、

黒き實まじるコスモスの花、

さてはまた雑草のうら枯れて

斑<sup>まだら</sup>を作る黄と緑。

## 書 齋

唯だ一事<sup>ひとこと</sup>の知りたさに

彼れを讀み、其れを讀み、

215〔初出〕詩六章―横濱貿易新報  
110・詩十章―明星  
昭大

215〔初出〕詩六章―横濱貿易新報  
110・詩十章―明星  
昭大